身近な小動物をズームアップで観察

――― 海と陸とのワラジムシ―――

北海道区水産研究所　宇田川　徹

数㎝の小動物では，肉眼でみたのと拡大してみたのとでは印象が違います．北海道の人々によくしられている『ワラジムシ』はエビやカニの仲間の甲殻類で，等脚（ワラジムシ）類という分類群に属します．この等脚（ワラジムシ）類は海から陸までのいろいろなすみ場所にくらしており，かたちもいろいろです．しかし，すみ場所やかたちがいろいろでも，基本的なからだのつくりは共通です．『ワラジムシ』やその仲間たちを拡大して観察すると，別のすがたがみえるはずです．

「用意するもの」海にすむシオムシ（学名 *Tecticeps glaber*），陸にすむものとしてワラジムシ （学名 *Porcellio scaber*）．海水．水槽．エアポンプ．双眼実体顕微鏡・虫眼鏡．

「不思議はどこだ」数㎝以内の小動物の場合，肉眼でみたときと，拡大してみたときとでは，その生き物の印象はまるで違うことがあります拡大して観察すると，からだのつくり（節の数や脚の数など）やからだのかたち（ひらべったいとか細長いとか）がよくわかります．

「考え方」からだのつくりは，同じ分類群の生き物であればすみ場所がちがっても共通です．からだのかたちは，すみ場所やうごきかた（歩くとか泳ぐとか）によって違ってきます．
ワラジムシの仲間は『・・・ムシ』とよばれていますが，エビ・カニの仲間です．甲殻類の中の等脚（ワラジムシ）類というグループに属しています．多くは海でくらしていますが，陸に上がったものもいます．等脚（ワラジムシ）類にはいろいろなかたちのものがおり，くらしぶりもいろいろで，すみ場所は深い海の底から砂漠にまでおよんでいます．今回，観察材料とする２種類のワラジムシ類は，ともに北海道の代表的なもので，釧路でもみられるものです．
シオムシは南千島・サハリン南部や北海道にすんでいて，浅い砂地の海底でくらしています．からだの模様は砂模様です．また夜に港にいくと，船や岸壁の明かりの下に群がって泳いでいることがあります．小判型で，平べったいかたちをしています．シオムシは１９５０ー１９６０年台に十勝・釧路・根室地方でたくさん漁獲されていました．肥料や魚の餌にするためです．年間１万トン以上が漁獲された年もありました．
また，カレイ類やシシャモなどの魚はシオムシを餌として食べています．
ワラジムシは北ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・南アフリカ・オセアニア，日本では本州では中部・関東・東北・北海道など，世界中の涼しい気候のところにすんでいます．北海道では，全道どこにでもすんでいます．陸にすむ等脚（ワラジムシ）類の中でこんなにいろいろな地域にすむものは他にいません．すみ場所も海辺から高い山の上までといろいろです．ワラジムシのからだは小判型で平べったいかたちをしています．からだの色は黒ー灰色のものが大部分です．このワラジムシこそがいわゆる『ワラジムシ』です．ワラジムシは家の中に侵入したり，家の床下や周りに多数集合することがあるために害虫扱いされていて，専用の殺虫剤まで売られています．しかし実際になにかわるさをしているわけではありません．不快（きもちわるい）とうったえる人がいるだけなのです．ワラジムシのようなものを『不快害虫』といい，人間を咬んだり刺したり病気を移したりする『衛生害虫』や，農作物を食べたり病気を移したりする『農業害虫』とは区別しています．

「実験のカンどころ」生き物を元気な状態に保つことが必要です．拡大するための道具としては，双眼実体顕微鏡を奨めます．

「もっと知りたい人へ」演示者までお問い合わせください．

（うだがわ　とおる　北水研）